

唯一者——

辻潤と大杉栄に関する断章

大月 健

「唯一者」とは、個人主義的無政府主義の先駆者マックス・スティルナーの思想の根幹をなす概念である。端的に云えば「唯一者」のはらむ思想とは「汝は汝の汝であれ」ということであって、一切の上位観念を棄脱して己れ自身に立返えることを訴えているだけで余り難かしいものではない。「汝は汝の汝であれ」という主張を説いた『唯一者とその所有』の著者に対して同世代のマルクスが『聖マックス』で執拗な批判を加えている。マルクスにしてみれば当然なことかもしれない。マルクスが夢想（科学的であろうが何であろうが根拠を覆えされれば一切無に帰すると云う意味では無想と断じてさしつかえないと思う）した共産主義社会と、「汝は汝の汝であれ」とは発想の時点から馴染まないものであることは分りきっているのだから……。

に命名した「低人」の思想とを包摂するものとして考えられるべきではないかと思っている。

ここで断っておかなければならないが、大杉栄はアナキズムの実践的な運動論としてはバクーニンの自由連合主義を採用している。その点で一番マックス・スティルナーの思想に忠実だったのは加藤一夫が組織した自由人連盟だったのではないかと思われる。しかし、大杉栄のエネルギーな行動力や生き方について語る時、ただ単に自由連合主義者として片付けることはけっしてできない。彼はバクーニンを尊敬している。しかし、バクーニンのエピソードとして甘んじる器ではなかったはずだ。博学な彼は、あらゆる知識を自分の好みに合わせて自由にしていく人間である。そこには多くの矛盾も見つけられるし、その事による試行錯誤も繰り返されている。有名な彼の「信者のごとく行為すると同時に、また懷疑者のごとく思索する」という言葉を思い浮かべる時に、彼の自己を認識している深さを知るのである。

辻潤と大杉栄といえは、「炎の女」伊藤野枝をさんでの因縁話がすぐに思い出される。この事については岩崎具夫の『炎の女—伊藤野枝伝』とか瀬戸内晴美の『美は乱調にあり』などにくわしく書いてあるのでそれを見てもらうとして話をすすめたいと思う。スティルネリア

「汝は汝の汝であれ」というマックス・スティルナーの思想の我国での実践者として辻潤と大杉栄をここであげなければならない。この事に関しては異議が出るかもしれない。大杉栄に関して、体系的に扱った唯一の名著『大杉栄研究』のなかで大沢正道は、マックス・スティルナーの大杉栄に与えた影響を决定的に扱っている。そして、彼以上にニーチェの影響を多く受けたのではないかと述べている。私も彼の評価を是認しなければならぬ。大沢正道の云うように大杉栄はニーチェの影響を多くくうむっていることは否定できない。にもかかわらず、私がここでマックス・スティルナーを持ち出そうとするのは何故か？ 一時期ニーチェの思想はスティルナーの思想の剽窃ではないかという論議がなされたことに由来している。結果的にはスティルナーの著作をニーチェが読んでいない、故に全く別のところで思索されたものであると判断が下されて決着がついたわけだが、それにしても、ニーチェの「超人」の思想とスティルナーの「唯一者」とは全くよく似ているのである。前者が「権力意志」を明確にうち出しているのに対して、後者がその事に関しては一切触れてはいないと云うことを除いては……。私はマックス・スティルナーの「唯一者」はニーチェの「超人」の思想と、それに対峙させて辻潤が自嘲的

を自称するニヒリストの第一人者・辻潤について簡単に触れれば、「僕はスチルネルを読んで初めて自分の態度がきまったのだ」というくらい「唯一者」の思想に自分自身の生涯をかける価値を見出したのである。詩人の萩原朔太郎が『辻潤と低人数』で云っている次の言葉が辻潤の生き様的一切を語っている。「そこで辻潤の選んだ道は、ペンで書く文学の表現ではなく、生活そのもの、人格そのもので表現する文学だった。つまり彼の場合でいえば『辻』という人そのものが、その表現された『作品』なのであった」と彼は云っている。明治以後多くの文学者が頻出しているが、彼のような評価を与えられた者はいない。そして、辻潤に対するこれ以上に適確な表現を私はいまだ知らない。

辻潤は『タダの詩』のなかで「思想を生活（行為）に転換する時にのみ、その人は思想の所有者である」と云っている。そして、彼は「思想の所有者」として敗戦色が濃厚になってきた昭和十九年、世間に忘れられながら東京の場末のアパートで餓えに悩まされながら逝ったのである。大杉栄についても同様なことが云える。彼も血肉化した「思想の所有者」であったが故に、関東大震災のどさくさにまぎれて虚殺される破目に陥ったのである。

辻潤は明治十七年に東京の浅草で生まれている。そし

て、大杉栄は明治十八年生まれである。辻潤の性格は内向的であり、すぐれた認識力を持っている。彼がニヒリズムに傾斜していく必然性は充分に認められる事柄である。大杉栄は、彼の行動が示すように情熱的で外向的な性格を持っている。彼が「唯一者」の思想を受容したとしても、ニーチェ的な「超人」の思想に魅力を感じたかどうかは容易に知ることができる。そして、それには必然的に「権力意志」が介在しているはずである。

イオム雑記

「飛びっちょ」ということ

横倉辰次

「イオム」9号には懐かしい亡師長谷川伸の言葉が引用されているので嬉ばしき限りでしたが一ツ間違があるので訂正致させて頂きます。頁次三十九の末尾から四十頁次にかけて、「各地の同業の親方を頼って旅をするのを西行とか飛びっちょとか言った」とありますが、これは何かの感違いでしょう。西行と飛びっちょでは意味が全然反対なのです。西行とは仰有る通り縁好の親方の処に辞義を切り草鞋を脱いで、そこで真面目に修業する事です。その月日の長短は兎も角として、これに対して飛びっちょとは全然無縁でも辞義を切り草鞋を脱ぎ乍ら殆んど仕事をせず逃げ出す、渡世の詞で言えば尻を割る事です。

飛びっちょの語源は存知ませんが、流布されて公認された代名詞になったのは明治末期、北海道の集治監の囚人の外役が廃止になり、大きな土木事業が民間業者に渡されて、世にいう監獄部屋が発生してからです。この監獄部屋の土方は大半が募集、ポン引などの甘口に誘われて、連れ込まれるのです。

これが一応、就労期間が六ヶ月契約であり、東京や大阪から騙されて前金が目当てで行く者を東京パツクとか大阪ポックと蔑視され、これは現地で過激な重労働で命を落す者もありました。この状況は大正末期昭和初期のプ

コレタリヤ文学にあり、里村欣三氏などが有名でした。

これとは反対に遅い者で、北海道で募集屋を訪れて、自分から監獄部屋に、身売りする者があったのです。二

・三日、女郎屋に登楼し散々飲んだり食ったり妓を抱きづめにして厩大な費用を乱費します。それは六ヶ月間の出当(でづら)ですから、そして監獄部屋に引渡されるのです、これを蛸を売ると申しました。語源は我が身を喰うから、株式会社を喰配と同意語です。この自分から身を売る蛸は散々女郎買をして豪遊をした揚句、蛸部屋に入りますが決して労働する意志はないのです、入って

数日間の間に逃亡するのです。これを飛びっちょと称したのです、契約は六ヶ月多大の前借があるのですから蛸部屋、監獄部屋の棒頭、用心棒(見張人)が黙ってはおりません、捕まれば焼を入れるという袋叩きの半殺しの目にあいます。その監視の眼を盗んで逃走する事を飛びっちょと言います、この冒険的な渡世をする事を蛸を売ると申したのです。彼等は六ヶ月の契約を年に数回した猛者がいたのです。飛びっちょは暗目の裡に善法には触れないのでした。やり得くやられ損なのです。監獄部屋では募集人夫が到登するとその内に飛びっちょする奴が何人か居ると、棒頭や用心棒には分り、

「いけねえ偉い奴が来た」と観念するのです。こん

な猛者には、

「霞の何々」とか「朝霧の何々」とか「飛行機の何々」という雑名があり、北海道中何処へ行っても看板で、

そして、
「おい頼むぞ」と叫んで逃亡するのです。用心棒や棒頭も一応は他の蛸の手前、追いピストルを発砲して刺止めたような顔をして戻りますが、最初からあきらめているので、ですから、この刀の刃渡りをするのが飛びっちょなのです。おおよそ西行とは正反対な労働者なのです。

日野氏の言う黒鋤、土方の中で最も精敢な反逆者です。こんな飛びっちょの出来る者も東京や大阪の帳場では真面目に働いている事もありました。大抵は奮でも根切りでもトロッコでも二人前、三人前も働ける腕を持ってましたが棒頭などにはならず半土方でノンビリ働いてました。

奮も根切りもトロも今では全部姿を消しました。それと一緒に真の稼業人である土方の姿も消えてしまいました。パワーシヤベルやベルトコンベアーの出現で、勿論、飛びっちょも死語になりました。

働かざる者喰うべからず

前田 幸長

今夏、私の勤め先の印刷会社の植字工が尿道結石の手術のため二カ月間入院した。八月末の給料日になって会社から電話があり、給料が九千円余りマイナスだから払うようにと請求された。彼が入院している病院は私の家から直ぐ近かったので、ある夜やって来て「一銭も入ってるところがないのに、いくら請求されても払えるかい。ほっといてやる。」とぼやいた。「ひどい話やな。そんなもん、ほっとけばいい。」と同意したが、何ともやり切れない気持だった。

日給で働く印刷工は仕事を休めば、その分だけ収入は減る訳だ。まる一カ月休めばその月の給料は無となる。健康保険、厚生年金、失業保険等の控除額がそのまま給料明細に載るからマイナスの給料となる。計算すれば確かにそうなのだが、どうにも割り切れない。入院してただでさえ出費がかかるというのに給料はマイナスだから払えという、冗談ではない。

彼の話を書いた翌日、「こんどの彼の入院に対し会社は給料がマイナスだからといってそれを請求したような。

だことがあった。するとその日は欠勤となり、皆勤手当を取り消された。皆勤を取り消されると休んだその日の日給と併せて三日分の日給を減らされる。

いくら会社が出勤日と決めたからといっても祭日を休んで欠勤とはどういうことか、と社長に抗議すると、日曜日以外は休日と認めていないという返事であった。労基法では祭日を休日とはいっていないからということである。勤続二十年という機械工は「へえ、祭日に休むと皆勤が消されるのか、知らなかった。」と呑気なものである。会社が出勤しろといえ、日曜日だろうと祭日だろうと出て来たのである。どうしても休むときは有給休暇を使っていたというのである。

会社が祭日を休日扱いしていないことを従業員のほとんどの者が知らないではないかといひ張って、社長にみんなの前で説明することを求めた。「わしに任せろ。悪いようにはしない。」と社長がいうと、即座に「社長にお任せします。」という奴がいたりするのを執拗に喰いさがり、その席で祭日を休日扱いすることを認めさせた。これをきっかけに何かあると社長とみんなで話し合うという形が慣例になった。だいたい私たちは会社に入るとき給料以外の細かいことなど気にしない。気に入らない会社ならいつでもやめて他へ変るという気持ちがあるのだが、労働条件など会社任せの

なんと薄情な、ひどい話ではないか。こんなところに何十年勤めてもどうしようもない。病氣したら会社は見殺しや、一家心中や。」とふれて回った。それはひどい話だと同調し、憤慨するものもいた。「仕方がない、働いていないんだから」というものもあり、反応は様々であった。

彼は勤続十五年余、年令も三十才の半ばで植字部の責任者をしており、会社にとって最も有能な働き手であるはずだ。三十人ほどの従業員のうち勤続十年以上というのが八〇%である。彼の会社に対する怒りと不信感私たちにとても他人事ではない。

とにかく会社に話しをしようということで、今後このように長期の病気のとき健康保険から支給される給料の六〇%というのを保険組合から支払われるのを待たず、会社が立て替え本人に給料として支払うということになった。しかし、話はそこまで一〇〇%つまり残りの四〇%を会社に保障させるところまでゆかなかった。みんなの考えるところは、労災でないから会社に責任がないし、実際に働いていないのだから、その分まで要求するのは間違っている、保険の六〇%は会社に負担をかけるいからというのであった。

私が会社に入って間もない頃、出勤日となった祭日を休んまま十年、二十年いつか過ぎる。何こともなければそれでもよいだろうが、私たちはいつも被害者の立場にあるのだ。なぐられて始めてそのことに気がつく訳だ。祭日を休日扱いにしていなかったことや病気で長欠している者に対し会社の保障がないことなど、その例である。今夏の植字工の二カ月の入院によってそれが分り、ようやく健康保険より支給される六〇%を会社に立て替え払いさせることにより、彼の場合のように零以下の給料という酷いことは免れることになったが、それにしてもこれは会社には何ら負担がかからないのだから、会社が〇%するのは当り前のことだ。私たちは、いま月給制を会社に要求しようと思話し合っている。私は日給でも月給でも同じことだと思し給料が労働の代償であることを私たちが認めている限り、「働かざる者喰うべからず」なのである。

イオム雑記

ささやかな提案

宮崎

晃

この小文の意図するところは、きわめて素朴なものであって、第一には、サンジカリズム（正確に言えばアマゾン・サンジカリズム）は、アナキズムの戦線から、いまいまだ、きっぱりと排除する意志表示をしたほうがよいのではないかと、

と、げんぎもつかわれているアルコサンジカリズムという用語が、かりにアナ系の労働組合をいみする用語としてつかわれるとすれば(じっさいにはアルコサンジカリズムはバケモノのように思えるが)、この際、これも国際的にアナ系労働組合をかんげつに表現する用語を統一化してはどうかという、ささやかな提案に帰する。

一、李石曾らパリグループの『新世紀』と革命の戦術

系統的に言えば、クロポトキンがジュラからジュネーヴにうつって、そこで一八七九年から『レゾオルテ』を創刊、一八八五年パリにうつり、グラヴがあとをついで、誌名も『レ・タン・ヌウウオ』とあらため、一九一四年に終焉。

むろん、それは蛇足。とにかくそうしたいきさつがあって、パリ留学中のアナキストの李石曾・張静江・大雅暉・緒民誼の諸君が、『ル・タン・ヌウオ』のエス語訳『ラ・テンポイ・ヌウオ』なるアナキズム誌(週刊)を創刊したのは一九〇七年、そのあとエス語の誌名をやめて標題を『新世紀』とあらため、ブルドン・クロポトキン、バクニン、マラテスタなどの論説をかかげ、中国の初期アナキズム運動に大きな影響をあたえた。しかし、じっさいには、ひみつなやりかたで中国本土にもちこまれた『新世紀』は三百部くらいだったという。

師復は、じつにこのパリグループの『新世紀』の影響をうけたのであって、かれのアナキズムは、わがくに

とは関係がない。師復の源流はパリグループである。

二、パリグループの革命論

李らは『新世紀』とはべつに、小冊子の双書を出した。その第一集として一九〇七年「革命」を出版している。

これはある種の革命の方法論を説いたもので、筆者は李石曾と緒民誼であろう。

「革命」は五項目をあげている。それはつぎにしめすものである。

イ、書物と演説　ロ、群力結合　ハ、抵抗(納税・徴兵・罷工)　ニ、暗殺(ピストル、爆弾)　ホ、大衆蜂起(革命・大改革)

このほか、『新世紀』には、第六号には「工会(労働組合)」、第九二号には「罷工」が紹介されるにとどまり、一九〇六年、アミアン憲章が可決され国際的に大きな影響をあたえたにしては、『新世紀』は反響はすくなくかった。(しかし、スカラピーノは、かれの著において「工会」や「罷工」が労働組合主義に関連するものとしてとりあげている。)

三、師復の革命論

師復ははじめ(一九〇六年)は孫文の同盟会に属し、当時留日していたが孫の広州蜂起を聞いて離日、軍閥李准をおそったが投げる前に爆弾が破裂してかれは重傷、逮捕されて三年間

獄中におり、そのころから、パリグループの影響をうけ、同盟会からアナキズムの、辛亥革命後の、清朝の打倒には成功したが、結局、袁世凱が国家権力をにぎり、そうした状況に接した中国の進歩分子は「社会改革の成功のためには民衆の国民性の改革、個性の独立、自我の覚醒から手をつけねばならぬ」ことに気付いた。

こうした状況というものがそこにはあった。一九一二年、師復は広東に「晦鳴学舎」(さらに民衆レベルの「心社」)をつくり、一九一三年から、中国社会運動史上、同時に中国アナキズム運動史上に消し去ることのできぬ大きな足跡をのこした師復の運動のひとつであるアナキズム誌『民声』が創刊され、民衆のなかには、いりこんだ破壊活動から建設活動のしつかりと大地をふみしめた有名な活動がはじまった。しかし、天は、かれにながい時間をあたえなかった。一九一五年三月、かれは肺患で上海のひみつの印刷所をつめたい固いペットのうえで夭折した。

師復の『晦鳴録』創刊宣言(一九一三年八月)にはつぎの文字がかかげられている。

いま記載するものの綱要をあえて約挙すればつぎのとおりである。

イ、共産主義　ロ、軍国主義反対　ハ、工団主義(サンジカリズム)　ニ、宗教主義反対　ホ、家族主義反

対　ヘ、肉食主義　ト、語言統一　チ、万国大同

この革命綱領のなかに耳なれない二、三のことばがあるが、中国の社会腐朽である賭ばく、売淫、遊かく、あへん、遊惰などを拒否するモラルなものをふくんでいるのである。

しかし、注目すべきは、師復にも「工団主義」が約挙されたもののひとつとしてかかげられているということである。そして、師復みずからか、訳者のスカラピーノのふでか、「サンジカリズム」ということばが挿入されているということである。師復について言えば、かれの言及した工団主義の意味するものに、研究者はふかく追究すべきであるが、おおむね見すごされている。

四、陳独秀のアナキズムとの対立

大ざっぱに言えば、中国社会は五・四運動(一九一九年)の時代にはいって、いくのであるが、この時代を代表する北京、天津の学生、三千人が天安門にスクラムをくんだとき、かれらを指導したのは、学生アナキスト区声白であった。区声白については後述しなければならないが、ここでは二応、のちに区声白と『新青年』誌上でアナキズム対コンミュニズムの論争で、中国の労働者、学生に大きな影響をあたえた陳独秀について要約したい。

しかし、かれは一九一五年、「上海で『青年雑誌』の

ちの『新青年』を創刊、伝統破壊、近代的革新を青年によびかけ、現状の変革をのぞむ青年によい影響をあたえ、一九一七年、学長蔡元培にまねかれて北京大学文科科長に就任、北京大学を新文化運動のメッカにしたことは言うまでもないが、一九一九年五・四運動のとき捕縛投獄されたが、出獄して上海にかえったところで、コミンテルン代表のヴォイチンスキーに接近、かれの援助で中国社会主義青年団を結成、ついで一九二一年結成された中国共産党の中央委員長となる。

これにさきだつて、ロシア革命によつて中国社会には、共産主義がヌーベルバーグの波となつて、アナキズムとのあいだにはげしい論争がおこなわれた。このとき、『新青年』によつた陳独秀をむこうにまわして、はげしくアナキズムをふりかざしてたつたのが、学生運動によつて、全中国の労働者、学生に支持された区声白である。

五、区声白の革命方法論

区声白は一九一三年、広東省に生まれ（したがって論敵陳独秀とは一三才年下である）、前記のように、五・四運動のとき北京の学生アナキストを指導、一九二〇年卒業、広州においてアナキズム運動をつづけた。

陳独秀のアナキズム攻撃のひとつは、「アナキズムは革命を成功させる能力もなければ、革命の余じんのなか

で、権力保持に成功する可能性もないということである。陳の心中には組織され集中された権力の重要性がふかく根をおろしていた。革命は規律なきバラバラの集合で推進することなどはありえないことである。もし、革命の余じんのなかで、レーニンのプロレタリアート独裁にかわつてクロポトキンの自由連合が採用されれば、革命はたちまち資本家に奪還されるであろうとして、権力と国家を擁護し、民衆にはいらじるしい不信をいだいている点でレーニン主義者であつたし、陳のいまひとつのテーマは、中国産業を發展させ、社会主義経済を創造して、西欧に追いつくことが必要である」と信じた。陳の主張は、まったく、レーニンの『国家と革命』のうけりであることはきわめてあきらかである。

区声白は、陳のアナキズム空想論にたいして、「サンジカリズム（工団主義）は、革命そのものの指導においても、革命後の権力維持においても、実行可能な具体的方法である」と強調した。そして「アナキズムは悪にたいしては暴力をもちいることをためらわぬ。ただ、アナキズムは制度化された権力と法律に反対する。アナキズムの自由は気ままなそれではなく社会と無関係には存在しない」と主張した。

しかし、区声白の主張の骨子にサンジカリズムがおか

れていることから眼をそらすことはできない。ここに使用されている工団主義の用語は筆者には納得がいかなかったので、この文がけいさいされているスカラーピノの『甲国アナキズム運動』の訳者、丸山松幸氏に、区の原文について教示をもとめたところ、同氏から以下の返書を得た。氏は、「サンジカリズムの中国語訳はつねに工団主義とされていて、嗚呼録も区もおなじである。お説のようにアナキズムとサンジカリズムの厳密な区分は、中国ではほとんど意識されておらず、むしろ、無政府社会を実現するための有力な手段としてサンジカリズムを考えているようだ。区の原文は以下のとおりである。『…所以共産的無政府主義者、多置身於工団派的運動、且用革命的手段、以撲滅現在的制度、實現無政府主義、斷不是想個人逃出社会、以實現無政府主義。』なお、丸山氏は、「現在に近代的労働運動がほとんど存在しなかつた中国では、アナキズムとサンジカリズムのするどい対立、相違は問題にならなかつた」と付言されている。

（十一月六日記・未完）

アナキズム／文学と思想

イ オ ム

バックナンバー
各250円

☆9号

義務教育の無償化をめざして／滝沢昇 労働に
関する断章（最終回）／日野善太郎 樹秀の響き
／海田真生 江川允通さんからの手紙 イオム
雑誌／萩原晋太郎・大門一樹・はぐまなおゆき

☆8号

アイルランド問題の理解のために／ワット・タ
イラー 詩／山口英・高島洋 ヨーロッパの旅
／平山房子 八日本無政府共産党Vへの批判
／宮崎晃 イオム雑誌／寺島珠雄・杉藤二郎・
河本乾次

☆7号

わが回想／塩長五郎 労働に関する断章(3)／日
野善太郎 短歌／高橋光吉 詩／山口英・高島
洋 講演記録八日本無政府共産党V／相沢尚夫